

嵯峨野における秦氏の到来期について

—地形から見た嵯峨野の開発過程—

東 洋一・加納敬二

はじめに

2006年、JR山陰線複線高架工事に先だち、花園駅・太秦駅間を縦断する総延長距離470m・幅3～4mの細長い旧線路を発掘調査した（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-6 常盤仲之町遺跡・広隆寺境内遺跡・上ノ段町遺跡』）。今回の調査地近辺は太秦という地名が示すように秦氏の本拠地と考えられており、同時代の奈良県飛鳥村を横断する発掘調査と同等の意義を持つものと考えた。

調査地の第1区・第3区全体と第2区西半は洪積台地の高台に位置し、第2区東半は御室川西岸の緩扇状地で低地に位置する。鉄道が敷設された明治の陸地測量部の地図等によれば高台が竹藪や畠、低地が水田であった。

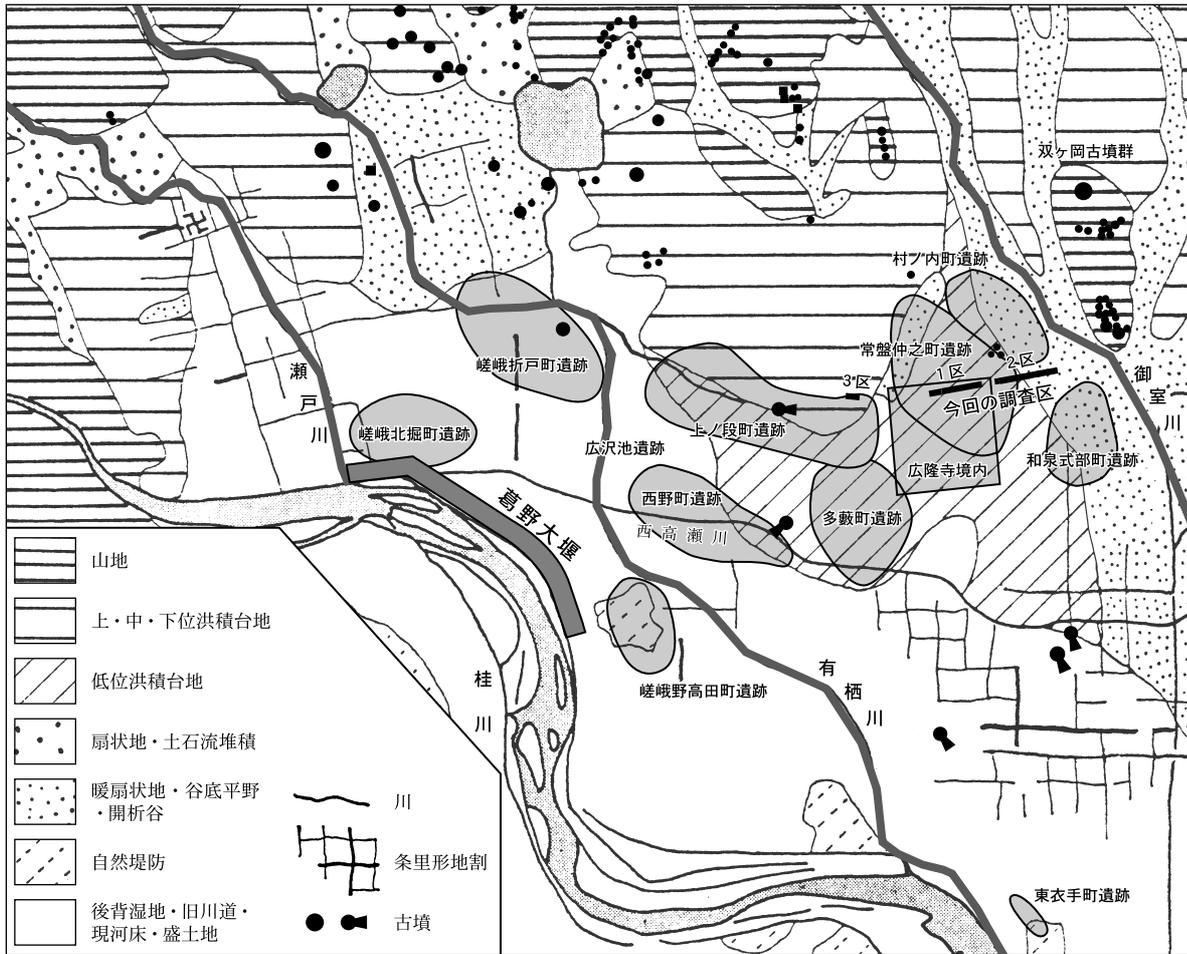
図1は金田章祐氏作成の嵯峨野地域微地形図に今回の調査地と弥生時代から飛鳥時代までの集落等の遺跡（京都市文化市民局『京都市遺跡地図台帳』2004年に従った）を加えた概念図である。今回の調査によって御室川西岸の低地がさらに西に拡大することが明らかになったので修正して示しておいた。表1は図1の集落遺跡内容一覧表である。また、図2は今回の調査の断面模式図である。

『報告書』のまとめにおいて「嵯峨野地域には前方後円墳が築造された5世紀末から6世紀代と洪積台地が集落として開発される7世紀代の2つの画期があり、いずれかの画期前に秦氏の到来時期を絞り込める段階に入ったといえよう。」と述べておいたが、本稿では更に進めて、広隆寺が造営される600年前後に葛野大堰が築造され、その時期に秦氏が嵯峨野に到来した可能性について論じてみたいと考えた。

なお、桂川西岸地帯については、4世紀以来の前方後円墳に代表される勢力が既に開発を進めており、そこを避けて新たに秦氏が嵯峨野地区に移住したとする井上満郎氏の見解（『渡来人』リポート・1987年）があり、また生産基盤も桂川西岸に注ぐ小畑川等の中小河川の開発が大きいためと考えるので桂川西岸問題は今回の考察から外した。

1. 今回の調査成果

第1区で飛鳥時代の竪穴住居・中世の南北溝・土壇墓等を、第2区で弥生時代中期の竪穴住居・古墳時代後期の竪穴住居・飛鳥時代の竪穴住居・平安時代前期の南北溝・中世末期の火葬遺構・中世末期の土取穴と考えられる土壇に廃棄された古墳の石室残骸等を検出した。出土遺構遺



※ 金田章祐『条里と村落の歴史地理学研究』大明堂 1985年 図2-9「葛野郡北西部の微地形と条里型地割の分布」を加工・加筆

図1 葛野郡北西部の地形と飛鳥時代以前の遺跡分布

物等は『報告書』を参照されたいが、本稿で論じたい弥生時代から飛鳥時代にかけての調査成果に絞って、以下に要約する。

① 御室川流域西岸に近い低地の第2区から弥生時代中期の竪穴住居を検出したことによって、調査地を挟んで北に位置する村ノ内町遺跡と東南に位置する和泉式部町遺跡が御室川西岸の低地に南北に並ぶ可能性が出てきた。また、御室川の源流は調査地西北約3キロに位置する梅ヶ畑にあり、そこで出土した弥生時代中期前半と考えられる京都府立総合資料館蔵の外縁付鈕式銅鐸4個も今回検出した弥生式土器と、ほぼ同時代に位置づけることができる。従って祭祀遺物としての銅鐸と今回の検出した集落跡とが御室川水系で繋がったと考える。また和泉式部町遺跡の更に南東に位置する平安京遷都以前の旧御室川流路に沿って形成されたと考えられる西京極遺跡・西院遺跡・山ノ内遺跡等の弥生時代集落跡との関連も今後注目されよう。

② 5世紀末から7世紀前半まで築造され続けた嵯峨野古墳群のなかでも、6世紀代の古墳に対応する集落が嵯峨野地区内で未確認であった（ただし有栖川東岸低地に位置する西野町遺跡もその時期の集落である可能性が高い）。しかし今回の調査で、第2区の弥生時代の竪穴住居検出付近から6世紀代の竪穴住居を3棟検出した。これらの竪穴住居は正方位を示していないのが特徴

遺跡名	弥生時代から飛鳥時代の調査概要	文献
村ノ内遺跡	御室川西岸の低地に立地する弥生時代中期の集落跡である。1980年の立会調査で弥生時代の遺物包含層を確認し、1986年の試掘・立会調査では弥生時代中期の土壘・溝・遺物包含層を検出し、遺跡範囲の確定が可能となった。また1988年の広域立会調査では弥生時代の遺物包含層と古墳時代後期の溝を確認している。	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘・立会調査概報』昭和55年度京都市文化観光局 1981年 「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘・立会調査概報』昭和61年度京都市文化観光局 1987年 「2 太秦地域の遺構分布」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 京都市埋蔵文化財研究所 1997年
常盤中之町遺跡	御室川西岸の台地に立地する7世紀代の集落跡である。1978年の発掘調査では竪穴住居跡24棟、掘立柱建物4棟が検出されている。	『常盤中之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅲ 1978年
和泉式部町遺跡	御室川西岸の低地に立地する弥生時代中期から古墳時代中期の集落跡である。1985年の広域立会調査により発見された。1987年の発掘調査では弥生時代中期から古墳時代中期までの竪穴住居跡を検出した。竪穴住居は弥生時代中期1棟、古墳時代前期12棟、古墳時代中期9棟を検出している。また韓式系土器および初期須恵器も出土している。	「16 広隆寺旧境内・一ノ井町遺跡・和泉式部町遺跡」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所1988年 「43 和泉式部町遺跡」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1991年
広隆寺境内遺跡	御室川西岸の台地に立地する飛鳥時代の集落跡である。常盤中之町遺跡とは北半部が重複する。1980年広隆寺新蓋玉箱建設に伴う調査や、1996年の太秦映画	「7 広隆寺旧境内2」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 京都市埋蔵文化財研究所 1997年 「関西文化財調査会による実績報告」1996年
上ノ段町遺跡	有栖川東岸に立地する飛鳥時代の集落跡である。1980年の蜂ヶ岡中学校校舎増築に伴う発掘調査で飛鳥時代の竪穴住居7棟、掘立柱建物1棟を検出した。1988年の同中学校の体育館改築に伴う発掘調査では、飛鳥時代の竪穴住居3棟、掘立柱建物4棟、土壘3、溝4を検出している。	「13 上ノ段町遺跡」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 京都市埋蔵文化財研究所 1997年。 「41 上ノ段町遺跡」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1993年
多藪町遺跡	有栖川東岸の台地に立地する。北半部は広隆寺境内遺跡と上ノ段町遺跡が接している。1991年の広域立会調査で古墳時代後期（7世紀代とみられる）の溝・土壘を検出し、さらに当該期の遺物包含層が多藪町を中心とする広範囲で確認されている。	「11 広隆寺旧境内・上ノ段町遺跡他」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1991年 「2 太秦地域の遺構分布」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 京都市埋蔵文化財研究所 1997年
西野町遺跡	有栖川東岸の低地に立地する古墳時代の集落跡である。1982年の嵯峨野小学校内の発掘調査で発見された。校内では7世紀代の竪穴住居跡5棟の他、溝と土壘を検出している。1988年の発掘調査では古墳時代前期の土壘、古墳時代後期（7世紀代とみられる）の竪穴住居跡3棟を検出した。また同年の広域立会調査では古墳時代前期・後期の遺物包含層を太秦西野町から嵯峨野千代ノ道の広域で確認している。	「55 嵯峨野小学校校内遺跡」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1982年 「43 西野町遺跡」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1993年 「2 太秦地域の遺構分布」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 京都市埋蔵文化財研究所 1997年
嵯峨折戸町遺跡	有栖川西岸の低地に立地する。1990年の広域立会調査で飛鳥時代の土壘と遺物包含層を検出。包含層は嵯峨折戸町を中心に広がる。1992年、嵯峨天竜寺道田町で関西文化財調査会が発掘調査し、飛鳥時代の竪穴住居跡1棟を検出している。	「3 嵯峨・嵐山地域の遺構分布」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 京都市埋蔵文化財研究所 1997年 「関西文化財調査会による実績報告」1992年
嵯峨北堀町遺跡	瀬戸川の東岸の低地に立地する。1987年の広域立会調査で飛鳥時代の土壘や柱穴、遺物包含層を検出している。	「3 嵯峨・嵐山地域の遺構分布」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 京都市埋蔵文化財研究所 1997年
嵯峨野高田町遺跡	桂川東岸の自然堤防上に立地する。1987年の広域立会調査で嵯峨野高田町の三ノ宮神社境内と南の耕作地で古墳時代後期（7世紀代とみられる）の須恵器・土師器を表面採取している。	「2 太秦地域の遺構分布 嵯峨野地区」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 京都市埋蔵文化財研究所 1997年
東衣手町遺跡	桂川東岸の自然堤防上に立地する。1985年の家屋新築工事に伴う調査で飛鳥時代の合わせ口覆棺墓が出土。	「Ⅲ 東衣手町遺跡 (UZ20)」『昭和60年度 京都市内遺跡試掘立会調査概報』京都市文化観光局 1988年

表1 嵯峨野地域の弥生時代から飛鳥時代の集落跡一覧表

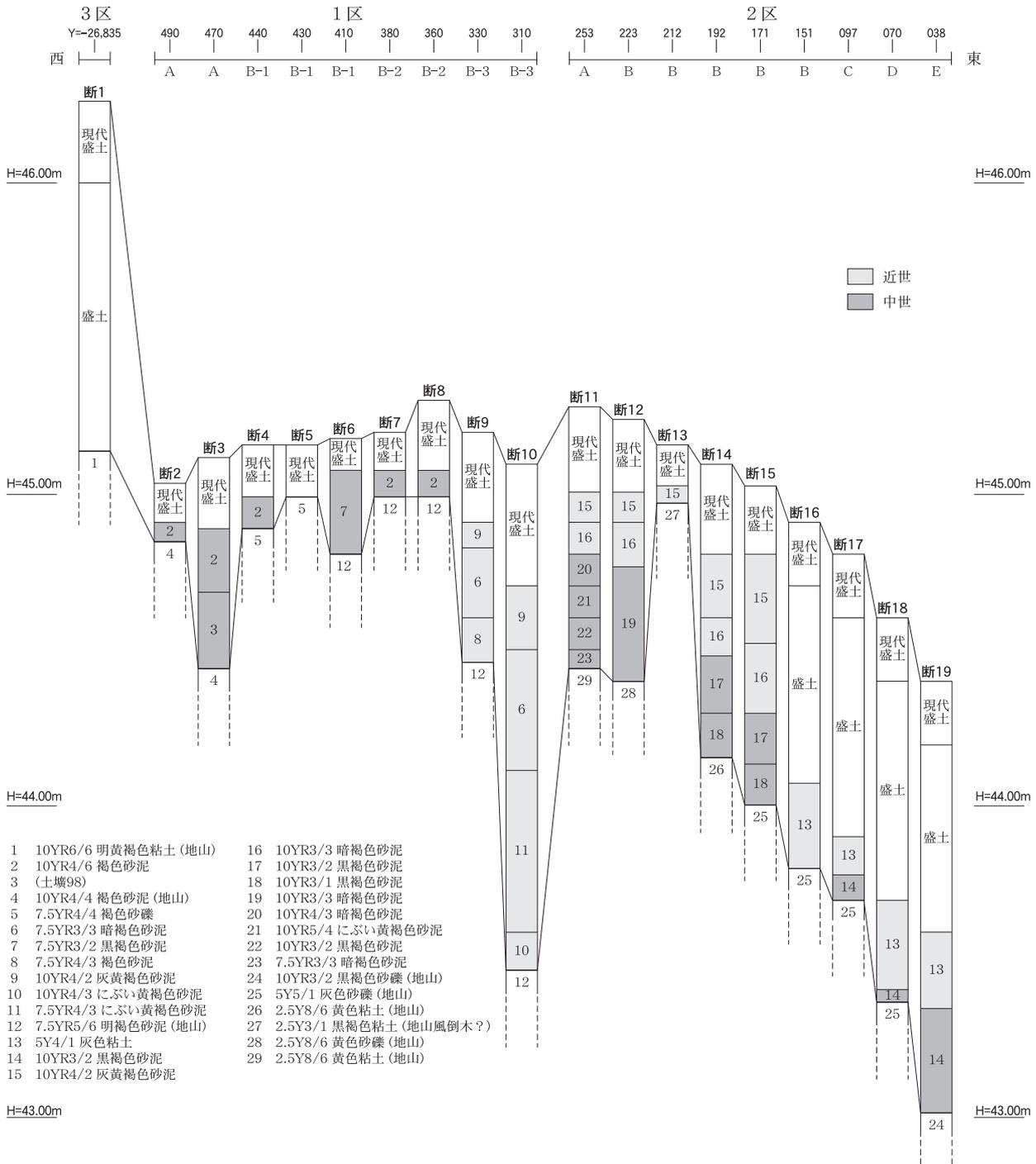


図2 断面模式図

である。またこの付近で出土した6世紀代の移動式カマドに渡来系的要素が窺われる。この低地に営まれた竪穴住居は6世紀代初頭には廃絶した和泉式部町集落が北上して営まれた可能性も考えられ、第1区の7世紀代に営まれた常盤仲之町集落跡と和泉式部町集落跡（弥生時代中期から古墳時代中期）との時代の隙間を埋める集落として注目される。

③ 7世紀代の竪穴住居を洪積台地の第1区と低地の第2区から検出した。このことは古墳が築かれていた洪積台地も低地に続いて新たに集落として開発されたことを意味し、第1区に含まれる7世紀代の常盤仲之町遺跡の集落範囲が第2区の低地まで拡大することが明らかとなった。

また調査地南の広隆寺境内や東映太秦映画村で検出されている同時代の竪穴住居も含めると、洪積台地上に現在まで約50棟以上検出されており、一時期に人口が増大した可能性がある。但しいずれの竪穴住居も正方位を示すものが多く、小型で出土遺物の内容も貧弱なことが7世紀代の特徴である。

今回の調査によって弥生時代中期・古墳時代後期・飛鳥時代の集落跡等が発見され嵯峨野の開発過程の一端が明らかになった。そして図1で示されるとおり、地形的に見れば低地である御室川西岸が弥生時代中期から開発されるのに対し、高地である嵯峨野洪積台地が古墳の造営を除けば600年前後に入ってから開発された可能性が高いことが判明した。

2. 従来の学説

秦氏の嵯峨野地域での到来時期については従来様々の見解があり、葛野大堰築造年代と共に不明な点が多い。また嵯峨野地域は律令制下においては一括して葛野郡楓野大堰郷として設定された可能性があり、天長五年（828）の『葛野郡班田図』に記載された人名の70%を超える人々が秦氏であったことが判明している。したがって少なくとも平安時代初期の嵯峨野は秦氏が盤踞した地域であったといえよう。

今日までの調査例から嵯峨野地域の秦氏に関して丸川義広氏は「北山城最大の古代氏族秦氏が渡来系氏族とされながらも渡来系的要素が少ない」（『日本考古学協会2003年度滋賀大会シンポジウム・ヤマト王権と渡来人』2005年、サンライズ出版）と指摘されている。このことは遺構・遺物から秦氏を特定することが困難なことを示している。

したがって嵯峨野地域の秦氏到来については嵯峨野に築造された前方後円墳や葛野大堰を例にして議論されてきた。しかし、それらの多くは嵯峨野地域の開発を500年前後から造営が開始された前方後円墳を指標とし、その前提として葛野大堰築造による嵯峨野の大開発があると仮定した上で、前方後円墳の被葬者を秦氏の首長に当て嵌める点で一致している（註1）。すなわち井上満郎氏が前掲書において「嵯峨野の古墳が五世紀末・六世紀初ということは、葬られている人間が生きてきたのは五世紀後半ということにならざるをえない。すなわち嵯峨野一帯の開発、つまりは秦氏の定着はこのときということになる。そして嵯峨野という水がかりの悪い高燥地の開発に絶対の条件であった水利をもたらした葛野大堰の建設は、この時をおいて考えられる時期はない。」というのがそれである。

3. 御室川・有栖川流域の古墳時代の遺跡分布

しかしながら、図1を見ると明らかなように嵯峨野地域の前方後円墳や大型円墳は1級河川の桂川東岸ではなく、

- ① 嵯峨野洪積台地を挟む御室川と有栖川の流域に集中して営まれている。

② それに平行する集落跡も有栖川東岸に位置する西野町遺跡（庄内式土器が出土していることに注目）や御室川西岸に位置する和泉式部町遺跡と今回調査した第2区低地に限定されている。

したがって5・6世紀代も弥生時代から引き継いだ中小の河川を制御して開発が進んだ可能性が高く、この時期の古墳造営もこれら低地に営まれた集落を基盤にした可能性がある。ところが洪積台地に営まれた集落は、すべて600年前後に成立した広隆寺を中心とした、広隆寺境内・常盤仲之町・上ノ段町・多藪町遺跡である（図1・表1）。

4. 文献から見た秦氏の嵯峨野定住期と遺跡分布

文献上で秦氏が嵯峨野地域に定着したことが初めて記載されるのは、7世紀初頭の『日本書紀』推古十一年に秦河勝が葛野蜂岡寺を創建したことを記すのが初見である。『日本書紀』欽明即位前紀に深草秦大津父の記事があることから、6世紀代の秦氏の本拠地は深草里の可能性もある。また葛野大堰が初めて「葛野川堰」として記載される『令集解・雜令』に引く『古記』も8世紀代の大宝令関連の史料である。秦氏が大堰を築造したと伝えるのは11世紀初頭成立の『政事要略』であるが、あくまでも伝承であり、然もいつ築堤したかの記載はない。

図1に見られるように、低地における飛鳥時代から新たに成立する遺跡に嵯峨北掘町遺跡・嵯峨折戸町遺跡や桂川東岸の自然堤防上で飛鳥時代の墓を検出した東衣手町遺跡がある。また洪積台地に位置する飛鳥時代の新たな遺跡としては仲ノ町遺跡や広隆寺境内遺跡・上ノ段町遺跡・多藪町遺跡があり、この時期に低地のみならず洪積台地において急激に集落遺跡が増大していることが判明する。これらの遺跡の多くは古墳時代末期または古墳時代後期からと報文で表現されているが、今日ではより詳しく600年前後で分けて飛鳥時代からとすべきであろう。

したがって今回の調査結果と以上の文献史料も踏まえるならば、洪積台地に広隆寺と集落が築かれた飛鳥時代を嵯峨野開発の画期と考えることも可能であろう。

5. 井上氏と和田氏の葛野大堰築堤期に関する論争と田辺説

この点について和田萃氏は「渡来人と日本文化」（『岩波講座・日本通史・第3巻』1994年、岩波書店）において、葛野大堰築造を前方後円墳が築造された時代から類推して「五世紀後半」とする前記の井上満郎氏の見解を批判し「桂川左岸にひろがる嵯峨野の古墳群の状況や、古市大溝および飛鳥川の事例からみて、六世紀後半とみておきたい。葛野大堰は秦氏により築造されたものであり、推古朝から皇極朝にかけて秦河勝が活躍する経済的基盤となった。」と築造期を大幅に降らしている。しかし和田説では井上氏が論拠として取り上げた5世紀末からとされる嵯峨野地域における前方後円墳成立をどのように考えるのかについては論じられていない。しかも和田氏のいう「桂川左岸にひろがる嵯峨野の古墳群の状況」が具体的に何を指すのかも不明である。

大堰成立の問題はまた、田辺昭三氏のように「嵐山辺りで何とか水をくい止めて、一言で言え

ば治水ですけれども、水のコントロールが可能になれば、生産力はとてもアップする。今まで以上に、今まで『国の秀』と言われている生産力の豊かな土地ではありませんけれども、それをさらに一步上昇させることができる。そういうことで私は、桂川治水、それに伴う灌漑、これらを手がけたのは秦氏であって、それに成功したことが、秦氏を京都盆地の中で最大勢力におし上げた一番の大きな理由だったのではないか。」（「考古学から見た平安京以前」『京都の歴史・1』京都新聞社、1993年）とする見解があり、したがって桂川の洪水を防ぐ堤防を主に考えるか、後に述べる井上氏のように井関として取水口と捉えるかによっても葛野大堰築堤の意義は異なってくる。つまり田辺氏のように前方後円墳築造の生産力基盤を桂川東岸に広がる低地を洪水から守るためとするか、井上氏のように嵯峨野の洪積台地を潤すための桂川からの取水によるものとするかによって議論の展開は異なるからである。

ところで嵯峨野地域の治水に必要なことは平安時代に令外官として「防葛野河使」が設置されたように堤防による大堰川の洪水対策であった。したがって井上氏が『古代の日本と渡来人』（明石書店、1999年）で和田氏による前記の批判に対し、前方後円墳築造期の考古学的根拠から「いえることは桂川の河岸段丘的な地形環境にあって高燥で水田農業に適さなかった土地を、大堰からの取水は耕作可能なものにしたということである。」という反論だけでは議論は噛み合わないのである。なぜなら大堰の問題は、桂川東岸の洪水地帯を堤防によって守り、耕作面積拡大が最大の問題となるからであり、また大堰が出来たとしても御室川・有栖川・瀬戸川等の水を引くことができるからである。

6. 嵯峨野洪積台地についての藤岡・西村氏説

平安時代前期の寛平二年（890）『広隆寺資材交替実録帳』に記載された広隆寺寺領の土地利用を分析された藤岡謙二郎・西村睦男氏によれば「現在『帷子の辻』駅北方から東南方向に伸びる洪積台地上に存した寺領は極めて少なく、しかもそのほとんどが耕地として役立っていない。それに対して、洪積台地以南の平地（殖槐里、上木嶋里、郊田里、市川里）には多くの寺領があり、なお常荒の地を含むとはいえ、田畠として利用されている面積も相当広い。平安初期においては洪積台地上がまだ本格的に開発される段階にはいたっていなかったのであろう。」（『北白川と嵯峨野』地人書房、1968年）と分析された。であるならば田辺氏が述べられたように「洪積台地以南の平地」である桂川によって形成された広大な後背湿地または氾濫源を、堤防を築くことによって洪水から守り、広大な水田開発を実現したと考えれば、それは十分に前方後円墳築造の物質的経済的基盤となりうるのである。

図1にも明らかなように桂川東岸は広大で平坦な氾濫源・後背湿地が存在することによって、桂川の洪水を堤防で防げば水田として活用できたのであり、現に今日に至るまで活用されてきた。したがって井上氏が「大堰からの取水は耕作可能なものにした」とされる「高燥で水田農業に適さなかった土地」は、今回の調査で判明したように飛鳥時代に入ってから初めて集落として開発

された可能性が高く、むしろ藤岡・西村両氏が述べられたように平安時代に至っても「ほとんどが耕地として役立っていない」のが実情だったのである。井上氏の想定とは逆に「高燥で水田農業に適さなかった土地」は、古墳が多く造られた地域であった。「高燥で水田農業に適さなかった土地」が古墳の他に活用方法があったとすれば、和田氏が「山背秦氏の一考察」『嵯峨野の古墳時代』(1971年)で想定された養蚕のための桑の栽培しかないであろう。今回の調査においても飛鳥時代の竪穴住居から紡錘車が出土しており、桑の栽培について土サンプルを採って確かめたかったが化学分析等によっても桑科植物は特定できないので、この点については諦めざるを得なかった。いずれにせよ堤防として成立してこそ、灌漑用の井関・堰が機能するという物理的可能性を踏まえることがここでは肝要なのである。

7. 田辺説の問題点

ところで田辺説で問題なのは図1を見ても明らかなように、この広大な水田開発地域が今日までの発掘調査によって飛鳥時代以前の遺跡が確認されていない空白地であるという点にある。このことは飛鳥時代以前は常に洪水地帯であったことを物語っている。ただし例外として立会調査で桂川東岸洪水直撃区の自然堤防上に位置する「嵯峨野高田町遺跡」から表面採取され、微妙な時期である「古墳時代後期」として報告された小片の土師器と須恵器が存在するが、7世紀代の可能性もあり、しかも遺構に伴うものではない(京都市埋蔵文化財研究所『京都嵯峨野の遺跡』1997年)。今後発見される可能性もあるが「集落跡」とされる「嵯峨野高田町遺跡」が飛鳥時代以前なのか以降なのかがここでの問題を解決するポイントとなろう。また桂川によって形成された自然堤防を繋いでこの広大な後背湿地を水田化する試みは弥生時代から行われていたかもしれない。また嵯峨野高田町遺跡もそのような試みの一過性の産物であったかもしれない。しかし大堰築堤以前は洪水で不安定な地域に留まったであろうし、現時点でも遺構は検出されていない。したがって葛野大堰、すなわち大堰川と呼ばれる区間に築堤された「萩原堤」がいつ形成されたのかという問題については、通説と逆に6世紀後半とする和田説の可能性も出てくるのである。もちろん洪水によって無くなったと考えることは可能であろうが、しかし空白地であったその地に飛鳥時代以降の遺跡は連綿と発見されているのである。

8. 葛野大堰飛鳥時代築堤説の浮上

和田氏が述べられたように葛野大堰築堤が6世紀後半だとすれば、国家の規制が強く作用し、最高位の身分的秩序を表すとされる前方後円墳や大型円墳を身分が相対的に低い秦氏の首長墓とするのには躊躇を覚える。しかも前方後円墳が衰退期に入った6世紀代まで築造され続ける保守的傾向が強いにもかかわらず、渡来系の新興勢力である秦氏の首長墓とするのも不審である。であるならば前方後円墳の被葬者を秦氏の首長に当て嵌める必要はないのではなかろうか。山背に

は山背国造や葛野県主等が秦氏進入以前に支配者として君臨していた可能性もあり今後検討の余地があるからである。

本来渡来系氏族は未開発地域や交通の要衝への戸籍を伴う安置を国家の基本政策としており、弥生時代のような自由な植民・移住はこの段階にはない。実在性が高いとされる欽明朝の秦大津父も深草の屯倉に安置されていた可能性が高い。和田氏は前掲書において推古朝の秦河勝と葛野秦寺や聖徳太子との関係を述べられた後「川勝は皇極紀3年7月条には葛野秦川勝とみえている。こうしたことから、雄略朝のこととする秦公酒の伝承もウズマサ（禹都万佐）と葛野太秦を前提としていることから、川勝の姿が伝説化して生じた伝承であるかもしれない。推古朝に屯倉の再編成が行われ、池溝開発もすすめられたことが、推古朝にみえるからである。」とされ暗に大堰築堤による屯倉開発と秦氏安置との関係を示唆されている。荒井秀規氏が「古代人の開発と定住」（『日本書紀の世界』思文閣出版、1996年）において河勝という名称もまた「河に勝」ということから堤防を築いた人のこととなり朝廷の命に従って秦川勝によって葛野大堰が築堤されたとする想定も可能となろう。

田辺氏は「先進技術の先取りなど実際の行動面では先進的なはずの秦氏が、思想的には逆に保守的で、頑固に依然として伝統的な前方後円墳という墳形を守っている所に、何か秦氏のもっている体質の一面を見ることができるといえるような気がします。」（前掲書）とされているが、「逆に保守的で、頑固に依然として伝統的な前方後円墳という墳形を守っている」秦氏以外の特に保守的な氏族の首長墓を考えた方が素直である（註2）。

今回検出した6世紀代の集落跡・移動式カマドと前方後円墳・葛野大堰をセットにして考えれば秦氏首長墓＝前方後円墳とする通説を補強する材料となる。しかし今回の調査でも明らかなように桂川からの取水は嵯峨野地域の開発にとって前提ではないし、たとえ不十分であったとしても御室川や有栖川から給水できた。まして標高40m以上に位置する嵯峨野洪積台地上への「大堰からの取水は」技術的に不可能である。もし仮に鑿溝できたとしても広隆寺以南で現在の西高瀬川ルートである可能性が高い。銅鐸が出土した梅ヶ畑祭祀遺跡から「秦」「寺」と書いた8世紀代の墨書土器が出土したことは、秦氏が嵯峨野地域に進出した後も依然として御室川が重要視されていた証拠となろう。（「梅ヶ畑祭祀遺跡」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1999年）

9. 600年以前の嵯峨野

以上のように弥生時代から御室川西岸・有栖川東岸で集落が営まれ始めたが、そこは現代に至るまで水田が営まれてきた地域である。この地域の支配者が嵯峨野地域の前方後円墳を築造したのであろう。この場合、前方後円墳の被葬者を秦氏とする必然性はない。他方、桂川東岸は洪水対策としての葛野大堰の築造によって経済的基礎が成立した可能性があり、大堰の築造によって新たに開発された地域と御室川・有栖川流域を支配した者が前方後円墳の被葬者と考えることも

できる。しかし前方後円墳の被葬者を秦氏と特定できる遺構・遺物は嵯峨野地域に限っていえば丸川氏の言われるように現時点では意外と少なく、遺構では和泉式部町遺跡の竪穴住居に取り付けたL字のカマド以外にない。渡来系を示す遺物も5世紀代の和泉式部町遺跡から出土した韓式土器や今回出土した6世紀代の移動性カマドの他に南天塚古墳から出土した新羅系土器とされる6世紀後半に舶載された壺以外にない。これらの遺物は交易によってもたらされた可能性があり、それらが即、秦氏であると断定できないのが現状である。しかも葛野大堰によって開発されたとされる広大な後背湿地に、この時期の遺跡は皆無である。また飛鳥時代以前の嵯峨野洪積台地からは今日まで古墳以外の確実な遺構・遺物を検出していないので、この地域の開発を前方後円墳の物質的・経済的基盤とすることは、桑畑であったことが証明されない限りできない。

10. 600年以降の嵯峨野

ところが飛鳥時代には洪積台地から今日までの調査だけでも竪穴住居50棟以上を広範囲に検出しており、古墳造営以外の目的で開発が及んだことを確認できる。また低地でも今回検出した2棟の竪穴住居を検出していることによって、この時期に急激な人口移入・人口膨張があったものと考えられる。この人口増大期に葛野大堰が築造されたと考えることも可能であろう。つまり田辺氏のいわれた生産力の増大は500年前後ではなく、この時期に該当するのではなかろうか。むしろ7世紀代に群集墳が造築され続けたことが嵯峨野地域の特色といえよう。それだけではなく広隆寺造営が大堰築造とほぼ同時に進行した可能性も高い。今回検出した7世紀代の竪穴住居の方位がほぼ北向きであることは8世紀以降の条里による開発前であり、広隆寺伽藍の方位等を考えざるを得ない。東映太秦映画村内の発掘調査（1996年、関西文化財調査会）で検出された7世紀後半の竪穴住居のカマドには再利用された飛鳥時代の瓦が検出されているので、太秦広隆寺造営は7世紀代となり北野廃寺造営と前後して造営された可能性が出てきた。それは秦氏が嵯峨野地域に到来した確実な時期を知る手がかりとして重要である。

11. 葛野蜂岡寺の問題

『日本書紀』に記載された「葛野蜂岡寺」の位置については諸説あるが、現在では京都最古の瓦とされる素弁十葉蓮華文軒丸瓦や有稜素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土した北野廃寺跡が有力視されている。しかし現広隆寺でもほぼ同様の有稜素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している。また飛鳥寺出土瓦に類似する、いわゆる星組の素弁八葉蓮華文軒丸瓦（写真1）



写真1 広隆寺旧境内出土

も1977年に広隆寺旧境内で出土しており、飛鳥時代前半に寺院があったことは確実である（『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 1997年・網伸也「寺院のようす」『渡来人、秦氏とその遺跡』京都ウエストサイド物語実行委員会 2003年参照）。

蜂岡という名称にある岡に注目すれば北野廃寺近辺には岡が見られない。北野廃寺が後に「野寺」と呼称されたのに対し、洪積台地の裾に南面する広隆寺は文字どおり岡に建っているといえよう。もしそうであれば飛鳥時代以降の遺構・遺物を洪積台地からは鎌倉時代に降るまで検出していないので竪穴住居は一時的な必要から営まれたものであるという推測ができる。また7世紀段階のしかも小型で質素な竪穴住居であることから、葛野大堰築造や広隆寺造営にかかわった人々や寺奴卑等の住居の可能性も考えられる。

まとめ

以上述べてきたように、葛野大堰築造・秦氏到来時期は通説よりほぼ100年降る可能性があると考えられる。古墳が造営された「高燥で水田農業に適さなかった土地」は「適さなかった土地」であるが故に一時的な必要性から開発された可能性が高い。しかし中世には別荘や広域な墓地となり、ついに近世には大部分が竹藪・茶畑・植木屋化してしまった。したがって今日残る静寂な嵯峨野のイメージが形成されたのも、弥生時代以降一貫してそこが人の住みにくい「高燥で水田農業に適さなかった土地」であったからに他ならない。

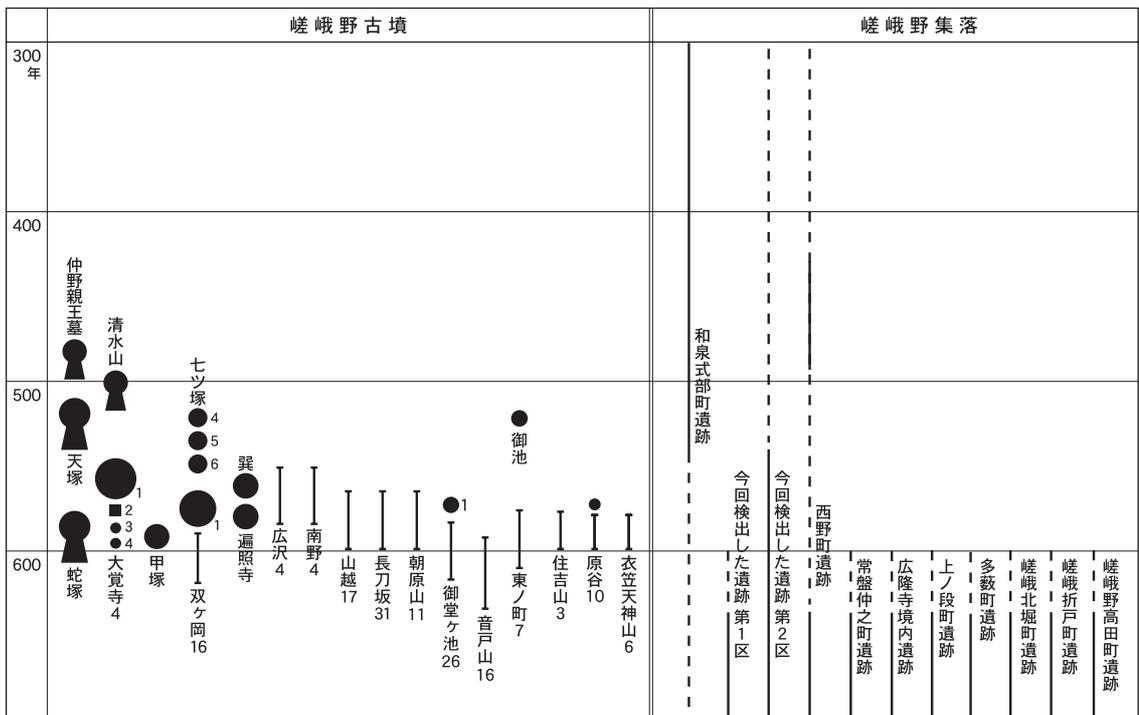


図3 嵯峨野の古墳群と集落

『日本考古学協会2003年度滋賀大会シンポジウム・ヤマト王権と渡来人』2005年に収録の丸川義広編年案に加工・加筆

今回の踏査によって弥生時代から御室川流域を軸に京都盆地の開発が進んだ可能性が高くなったことは、ともすれば桂川に目を奪われて無視されがちな嵯峨野を縦断する御室川・有栖川・瀬戸川、およびその流域の遺跡分布を再認識する上で大きな成果であったと考える。今回の調査終了後、御室川旧流路に近いと考えられる西京極遺跡から弥生時代の方形周溝墓群が検出され西院月双町遺跡からは弥生時代から奈良時代にかけての竪穴住居跡等が検出されていることは記憶に新しい。弥生時代から古墳時代にかけては大河川である桂川や鴨川は制御できない暴れ川であった可能性が高く、桂川や鴨川に注ぐ中小の河川を軸に開発が展開していったものとする。だからこそ制御可能な御室川流域を足場として秦氏が新たに移住して葛野大堰が築堤されたのであろう。秦氏の本拠地は洪積台地と低地が接する広隆寺南に広がる太秦地域か、戦前まで「郡」の地名が残り葛野郡郡衙所在地と目される西京極の旧郡村近辺であろう。

丸川氏が指摘されたように「渡来系的要素が少ない」という嵯峨野秦氏の特徴は、通説とは逆に移住してきた時代が新しいことを示している。和田氏が言われたように「6世紀後半代」、しかも、もっと絞り込んで秦川勝や聖徳太子が活躍したとされる583年の大乱以降であったとするならば、丸川氏の指摘は、むしろ当然であろう。従って600年前後の台地や山地に造営された群集墳の多くは秦氏であるとする。群集墳成立の問題については今後の課題としたいが、図3は嵯峨野地域の古墳編年案（丸川氏作成）と集落遺跡との対応関係を示す概念図である。群集墳成立期が集落成立期に先行しており対応していないが、それは群集墳成立および終焉期をやや古く設定したためと思われる。群集墳期をほぼ50年繰り下げれば7世紀代に増大する集落に対応するように考えるがどうであろうか。群集墳出土遺物も現在では7世紀代としてよいと考えられるものが多い。この点に関しては、いわゆる「家父長的世帯共同体」成立の問題と合わせて今後の課題としたい。

最後に、本稿を論じるにあたり丸川義広氏・木下保明氏から多くの助言を得たことを、ここに記して感謝いたします。

註釈

- (1) 鎌田元一「嵯峨野の古墳群に関する覚書」『嵯峨野の古墳時代』京都大学考古学研究会、1971年。高橋美久二「嵯峨野の古墳と秦氏」『史跡でつづる京都の歴史』法律文化社、1977年。井上満郎『渡来人』リポート、1987年。同『古代の日本と渡来人』明石書店、1999年。山尾幸久「古代の洛西と葛野の秦氏」『洛西探訪』淡交社、1990年。田辺昭三「考古学から見た平安京以前」『京都の歴史・1』京都新聞社、1993年。立命館大学考古学研究会『朝原山・長刀坂古墳群』2004年。等がそれである。後に取り上げる和田萃説は唯一の例外である。
- (2) であるならば583年の大連物部守屋滅亡の新たな情勢に対応した国家による秦氏の嵯峨野地域への配置・再開等も考えられよう。廃仏毀釈まで広隆寺桂宮院境内に存在した大酒神社について『雍州府志』(1684年)は「一説物部尾輿子弓削守屋大連之社也、又謂所祭秦河勝也」としており、嵯峨野には物部氏の有力枝族である阿刀氏の氏神を祭る阿刀神社（少なくとも平安時代前期まで遡れる）もある。また9世紀代に成立したとされる『先代旧事本紀』は山代国造・葛野県主が物部氏系であることを暗示す

る。なお大酒神社は正式には大避神社と書き、秦氏にとって大いに避けるべき人物を祭ったことも考えられる（播磨の大避神社にも守屋を祭る言い伝えがあることが『雍州府志』に見える）。同時代期の四天王寺創建についても『日本書紀』崇峻天皇即位前紀に「乱をしずめて後に、摂津国にして、四天王寺を造る。大連の奴の半と宅とを分けて、大寺の奴・田莊とす」とある。物部氏敗北後に物部氏所有の奴・土地の半ばを四天王寺造営の資としたことが窺えるが、草創期古代寺院造営の在り方を考える上で興味深い。この点について民俗学の谷川健一氏が四天王寺境内の太子堂後方にある物部守屋を祭る「守屋祠」について詳細に調査されている。守屋の祠が現存することは大酒神社との歴史的共通点として注目されよう（『四天王寺の鷹・謎の秦氏と物部氏を追って』河出書房新社、2006年）。このことは秦氏の擬制的同族集団関係を探る上でも参考になろう。なお郡成立以前の山背の状況を論じたものに視点は異なるが吉村正親氏「山背における郡成立の背景」（『平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集刊行会、1993年）がある。

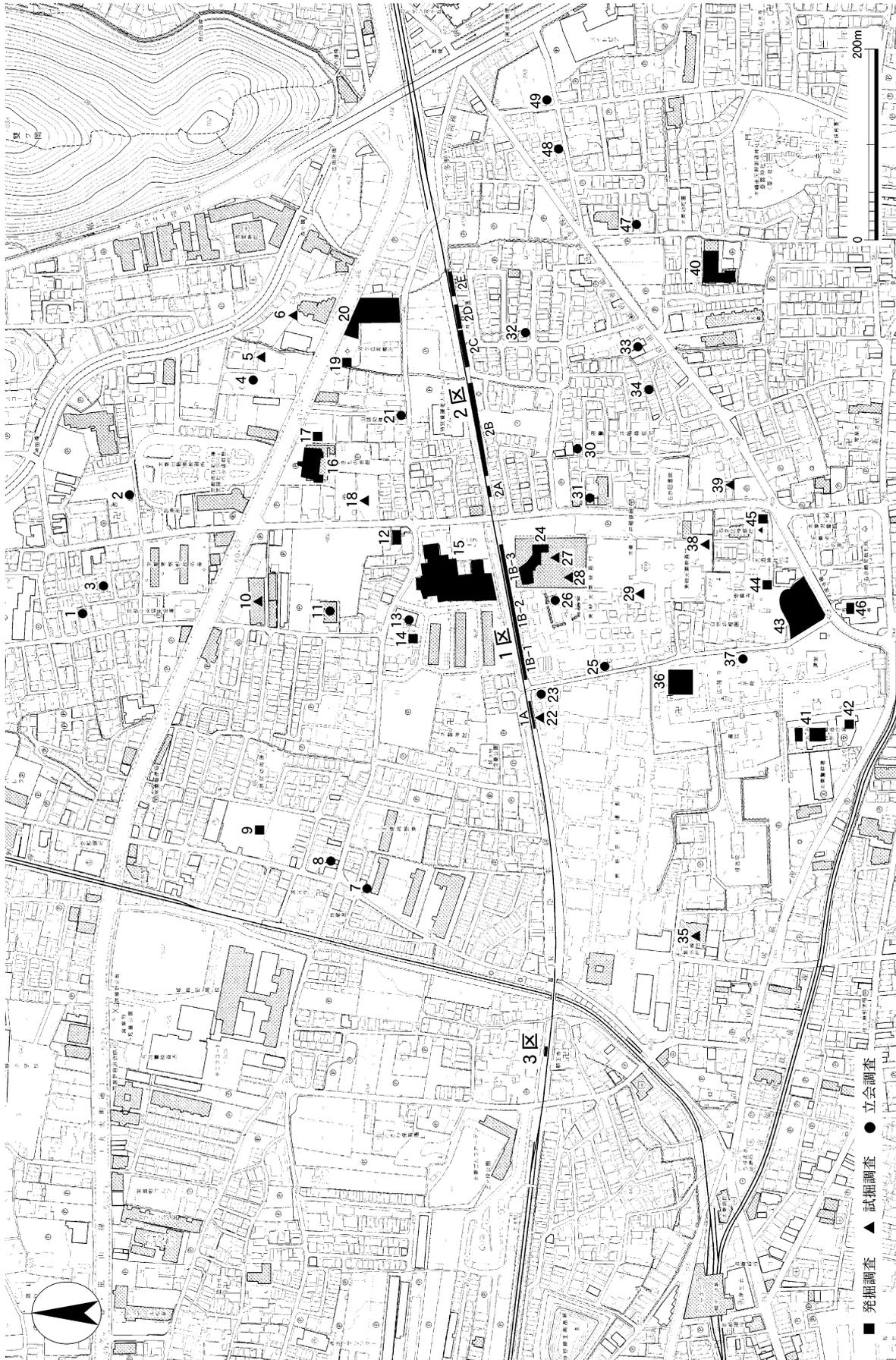


図4 調査位置図 (1 : 6,000)

※調査地点の数字は表2のNo.と対応

No.	調査年度	方法	調査日	調査概要	文 献
1	1986	試掘立会	1986.11.21～1987.04.03	弥生中期の土壌・流路・包含層、土師器・陶器・瓦	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
2	1988	広域立会	1988.05.26～1989.05.12	弥生の包含層、古墳後期の溝、平安の包含層、弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦	「常盤東ノ町古墳群・仁和寺院家跡・広隆寺旧境内」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年
3	1993	立会	1993.10.06～1993.10.13	弥生の包含層	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡立会調査概報』平成5年度 京都市文化観光局 1994年
4	1980	立会	1980.05.22	弥生の包含層、弥生土器	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度 京都市文化観光局 1981年
5	1988	試掘	1988.10.28	弥生の包含層、弥生土器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度 京都市文化観光局 1989年
6	1990	試掘	1991.03.12	平安の溝、弥生～平安の包含層	「試掘一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992年
7	1982	立会	1983.03.03	平安の柱穴	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
8	1986	立会	1986.06.03	室町の土壌5・包含層、土師器・瓦器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
9	2001	発掘	2001.05.07～2001.06.29	室町時代の土壌・溝	「常盤仲之町遺跡」『京都府遺跡調査概報』第102冊-1（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2002年
10	1982	試掘	1982.08.09～1982.08.10	古墳後期～室町の土壌・包含層、土師器・白磁	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
11	1991	立会	1991.12.03～1991.12.05	平安前期の長方形土壌、須恵器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992年
12	1979	発掘	1980.02.27～1980.03.15	古墳周溝、鎌倉の土壌2、土師器・須恵器・瓦器・陶器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
13	1986	立会	1986.11.04～1986.11.25	平安後期の東西溝	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
14	1977	発掘	1978.01.30～1978.02.18	室町の柱穴・土壌	「日本電信電話公社嵯峨野住宅集会所新築に伴う発掘調査」『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅲ（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年
15	1976	発掘	1977.02.01～1977.06.10	古墳後期の竪穴住居24・建物4・溝、平安の建物4他	『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅲ（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年
16	1976	発掘	1976.10.26～1976.12.06	古墳後期の円墳3、室町～江戸の土壌墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-I（財）京都市埋蔵文化財研究所 1977年
17	1976	発掘	1976.11.03～1976.11.15	古墳後期の円墳1、室町～江戸の土壌墓群、土師器・須恵器	「常盤東ノ町古墳群」『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-I』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年
18	1992	試掘	1993.03.25	古墳の溝1、平安・鎌倉の土壌2、土師器・須恵器・銭	「常盤東ノ町古墳群」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成5年度 京都市文化観光局 1994年
19	1976	発掘	1976.11.24～1976.12.07	平安の柱穴群・土壌2、弥生～古墳の包含層、弥生土器・須恵器	「仁和寺子院跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集1979-I』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年
20	1995	立会	1995.09.26～1995.10.07	平安の溝、古墳の溝、時期不明の土壌、溝、土師器・刀子・須恵器	『京都市内遺跡立会調査概報』平成7年度 京都市文化観光局 1996年
21	1985	立会	1985.12.25～1986.01.06	路面	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1986年
22	1984	試掘	1984.11.30	平安の土壌1・包含層、須恵器・瓦	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度 京都市文化観光局 1985年
23	1989	立会	1989.09.04	平安中期の土壌、土師器・須恵器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990年
24	1995	発掘	1996.01.11～1996.04.13	飛鳥の竪穴住居4、平安～江戸の遺構	関西文化財調査会による発掘調査実績報告 近日報告書刊行予定
25	1988	広域立会	88.05.26～89.05.12	古墳～江戸の遺構・包含層、土師器・須恵器・瓦	「常盤東ノ町古墳群・仁和寺院家跡・広隆寺旧境内」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年

表2-1 周辺の主な調査一覧

No.	調査年度	方法	調査日	調査概要	文 献
26	1980	立会	1980.12.13	室町の土壌墓1、古墳後期の包含層	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度 京都市文化観光局 1981年
27	1981	試掘	1981.12.07	室町の土壌1、平安～室町の包含層	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘・立会調査概報』昭和56年度 京都市文化観光局 1982年
28	1982	試掘	1982.12.10	古墳後期～室町の土壌・柱穴	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
29	1981	試掘	1981.12.14～ 1981.12.17	鎌倉～室町の土壌6・柱穴18、土師器・須恵器・瓦器・瓦	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘・立会調査概報』昭和56年度 京都市文化観光局 1982年
30	1986	広域立会	1987.02.23～ 1988.03.30	平安～江戸の遺構・包含層、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・軒瓦	「広隆寺旧境内・一ノ井遺跡・和泉式部町遺跡」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988年
31	1988	立会	1989.01.24	鎌倉の包含層、土師器・白磁	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990年
32	1986	広域立会	1987.02.23	弥生～江戸の遺構・包含層、弥生土器・土師器・須恵器・軒瓦	「広隆寺旧境内・上ノ段町遺跡・和泉式部町・一ノ井遺跡・森ヶ東瓦窯跡・常盤東ノ町古墳群」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年
33	1984	立会	1984.09.17	平安の包含層	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度 京都市文化観光局 1985年
34	1987	立会	1987.09.09	平安～室町の包含層	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度 京都市文化観光局 1988年
35	1985	試掘	1985.07.24	古墳後期の包含層、須恵器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1986年
36	1979	発掘	1980.02.01～ 1980.03.31	古墳後期の竪穴住居、平安・鎌倉・室町の土壌、土師器・須恵器・輸入陶磁器・陶器・磁器・植輪	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
37	1982	立会	1982.09.10～ 1982.09.22	平安中期・後期の土壌、土師器・須恵器・瓦・瓦器	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
38	1983	試掘	1983.12.14	平安前期・後期の土壌・包含層、土師器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和58年度 京都市文化観光局 1984年
39	1988	試掘	1988.08.01	鎌倉の柱穴・土壌・包含層、土師器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度 京都市文化観光局 1989年
40	1987	発掘	1987.05.06～ 1987.07.31	弥生中期の竪穴住居、古墳前期の竪穴住居・土師器、古墳中期の須恵器	「和泉式部町遺跡」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年
41	1991	発掘	1992.01.12～ 1992.02.22	平安前期～中期の溝・土壌・柱穴、江戸の溝	「広隆寺旧境内2」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
42	1977	発掘	1977.05.03～ 1977.06.12	飛鳥の墓壇、奈良～平安の建物、瓦・須恵器・土師器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
43	1977	発掘	1977.11.11～ 1978.02.11	平安後期の経塚群、土師器・須恵器・白磁・軒瓦・金属製品・石製品他	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
44	1993	発掘	1993.04.17～ 1993.05.31	飛鳥の竪穴住居・土壌、平安中期の溝・柱穴	「広隆寺旧境内」『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
45	1980	発掘	1980.10.20～ 1980.11.24	古墳後期の竪穴住居、平安中期の建物・柵・柱穴	『広隆寺跡 一右京検察庁庁舎改築に伴う発掘調査の概要』昭和55年度（財）京都市埋蔵文化財研究所 1981年
46	1990	発掘	1991.03.19～ 1991.04.20	飛鳥の溝・柱穴・土壌、平安～室町の包含層	「広隆寺旧境内1」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
47	1985	広域立会	1985.07.01～ 1986.03.15	古墳時代竪穴住居・土壌・溝・柱穴、平安前期・中期の遺構多数、室町～江戸の遺構多数	「広隆寺旧境内・一ノ井遺跡・和泉式部町遺跡」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988年
48	1985	広域立会	1985.05.07～ 1985.11.30	古墳前期の竪穴住居・土壌・溝、平安中期の土壌・流路、室町～江戸の土壌・溝・他	「森ヶ東瓦窯跡・和泉式部町遺跡」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988年
49	1986	立会	1986.11.17	ロストル式平窯1・灰原、軒平瓦4	「森ヶ東瓦窯跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年

表 2-2 周辺の主な調査一覧